

令和5年度・令和6年度「ちばっ子の学び変革」推進事業研究成果報告書

富里市立富里南中学校

研究主題

内容を読み解き、自分の言葉で表現する力をつけさせるための工夫
～主体的・対話的で深い学びの視点に立った活動を通して～

1 学校の概要

富里南中学校は昭和63年に創立した。学区は富里市の南に位置する。生徒246名、職員21名、学級数9（うち特別支援学級2）の中規模校である。

2 研究の概要

(1) 児童生徒の実態と課題

令和4年度全国学力・学習状況調査(6年生時)において、国語「記述式」の問題を解くこと、「読むこと」に課題がみられた。特に、「文章を読み、自分の知識や経験と結び付けて自分の考えを書く」ということに大きな課題がみられた。また、馴染みのない語句、概念が含まれた説明的文章のように長い文章の内容を読み解くことも課題であった。

(2) 学力向上のための取組

令和5年度は、全教科で必要な「内容を読み解き、自分の言葉で表現する力」を身に付けさせるために、すべての基礎である国語科を中心に研究に取り組むことにした。そこで、下記の仮説を立て、研究を進めた。

- 1 初見の文章を多く読み解く訓練を重ねていけば、馴染みのない語句、概念が含まれた内容を読み解く力の向上を図ることができるであろう。
- 2 授業や定期テストを通して長文を読み、その中から必要な語句を選択したり、つなぎ合わせたりして自分の言葉として表現する機会を多く設けることで、書く力がつき、記述式の問題を解く力の向上を図ることができるであろう。
- 3 全教科において、自分の言葉で表現する活動を取り入れることで、言語表現の向上を図ることができるであろう。

令和5年度の取り組みを受けて、令和6年度は国語科を基盤として教科等横断的に「内容を読み解き、自分の言葉で表現する力」を身に付けさせるための研究に取り組んだ。その際、研究主題に迫るために『根拠を明確にして表現する』ことを重点とし、以下の取り組みをした。

- 4月末までに、各教科の年間指導計画に『根拠を明確にして表現するための指導の工夫』を位置づけ、授業実践に取り組んだ。
- 生活ノートや廊下掲示用の個人新聞等を記入する際にも、『根拠を明確にして表現する』ことを意識させた。

【授業改善研修の実施】

1 学習指導部会議

- ・週に1回実施し、情報共有を行った。
- ・生徒の学習の様子や、「自分の力で書く」ことができる生徒の割合を確認した。
- ・教育課程の検討

2 授業参観と授業改善

- ・相互に授業参観を行い、感想等を伝え合うことで授業改善につなげる。
- ・富里市教育委員会による、授業参観（若年層中心）の実施。

3 教科会議の充実

- ・指導方法共有。特に「主体的、対話的で深い学び」の方法の共通理解。
- ・テスト問題検討

【実際の取組・授業改善】

★仮説に基づいた授業改善★

- 1 初見の文章を多く読み解く訓練を重ねていけば、馴染みのない語句、概念が含まれた内容を読み解く力の向上を図ることができるであろう。

① 語彙力不足の解消

○アウトプットの前にインプットをする

- ・単元（小説など）で、自分が「ぐっと来た言葉（使ってみたい言葉）」をノートに書き溜める。
- ・他者（級友や教科書等の作者）の作品を読み、接続詞、言葉遣い、表現でキラリを光るものを取り上げ、共有する。
- ・作品を作る時に、既習の言葉で「この言葉、使いたい」をノートから探して使ってみる。

② 視写・速音読の実施

○富里市で実施している「とみの国検定」視写の取組

- ・視写は、インプットとアウトプットを繰り返すことで記憶力を向上させる効果があると言われていることから、朝読書の時間や国語の授業の中で定期的に取り組ませた。
- ・富里市では、中学生は5分で200字以上、10分で400字以上の文章を視写することが目標である。
- ・学習として視写に取り組み、5分検定と10分検定を使い分けながら調査を行った。

○速音読の実施

- ・音読や読解演習を行う過程で、「文章を読む速度が遅い」、「理解力や集中力が低い」、「文章を読む経験が少ない」生徒が多いことから国語科教員が必要を感じ、実施した。
- ・速音読には脳を刺激する効果、理解力や集中力の向上効果があると言われている。
- ・毎回授業開始時に、有名な文学作品を1分程度で読み切れる分量にし、タイムを計測する。

※視写・速音読は、いずれも同じ内容を2～3度繰り返し行う。一度に捉えられる言葉の量が増え、馴染みのない言葉にも関心が高まることを目的としている。

- 2 授業や定期テストにおいて長文を読み、その中から必要な語句を選択したり、つなぎ合わせたりして自分の言葉として表現する機会を多く設けることで、書く力が身に付き、記述式の問題を解く力の向上を図ることができるであろう。

○ 継続した「書く活動」の検討・実施

- ・「書く活動」を授業の中で、年間通して継続的に行った。
- ・国語科の定期テストには、毎回200字作文を実施した。(テストは、年間4回行っている)
- ・「書く活動」の際には、グループ活動(対話的活動)を必ず取り入れ、相互で内容の確認を行い、友人の意見を参考にすることで、内容を深めた。

3 全教科において、自分の言葉で表現する活動を取り入れることで、言語表現の向上を図ることができるであろう。

- ・道徳の感想文や美術科の鑑賞文、数学科の考えの説明、「行事後の振り返りシートを通して、学校全体で「書く活動」を継続して行った。
- ・「書く活動」の際には、主体的で対話的な深い学びを実現するために、話し合い活動を取り入れた。人の意見を参考にすることで自分の考えを深めさせた。また、「根拠を明確にして、自分の意見を表現する」ことで「相手に伝わる文章を書く」ことを意識させた。
- ・生活記録ノートを毎日記入させることで、書くことへの抵抗感を緩和させた。

(3) 加配教員(学習サポーターを含む)の活用

本校では、加配教員を少人数指導として位置づけ、国語科の授業実践に取り組んだ。

(令和6年6月末まで)

【少人数】

問題演習(長文の読解の仕方、答え方)、作文演習(意見文の書き方、根拠を明確にした文章の書き方)の際に、少人数授業を行った。

少人数指導では、「質問がしやすい」「また行いたい」という生徒の意見も多く出た。少人数指導は、自分の考えや答えに自信をつけるために有効であった。作文指導では、授業内に添削することができ、適切な言葉遣いやよりよい表現を共有することができた。「書くこと」に関しては、個人差が大きいため、苦手としている生徒にとって少人数指導は大変効果的であった。

実際に行った取り組みは以下のとおりである。

- ・生徒の実態に合わせた少人数指導を行った。(丁寧コース・自分で頑張ろうコース)
- ・教科書の単元とは別に、初見の文章を読み解く授業を設定した。
- ・200字の意見文を10分で書く授業を毎月2回程度行った。

3 研究の成果

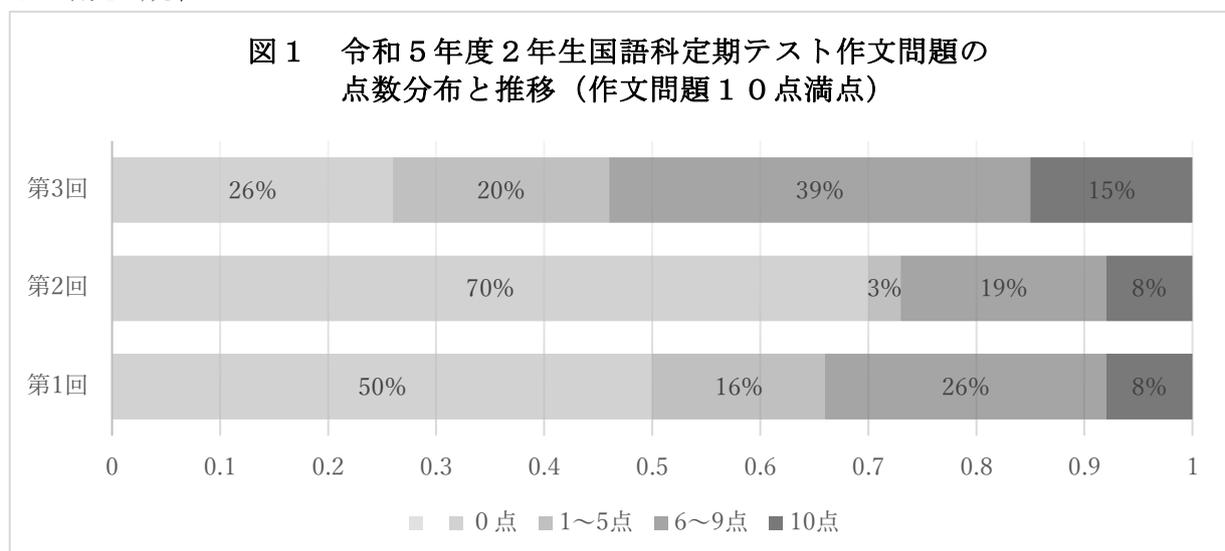


図2 令和6年度3年生国語科定期テスト作文問題の点数分布と推移（作文問題10点満点）

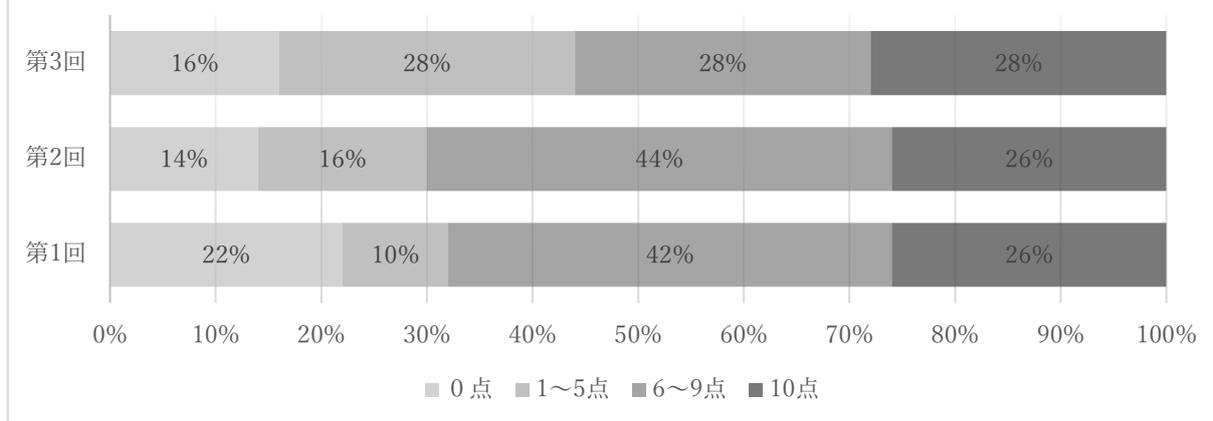


図3 アンケート結果（令和6年4月）

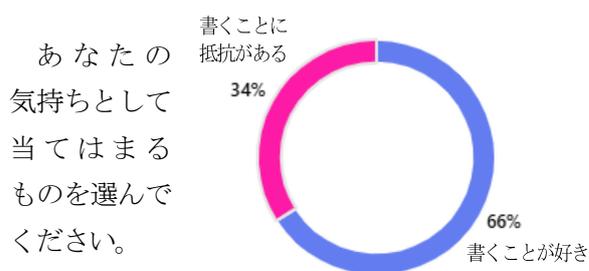


図4 アンケート結果（令和6年12月）

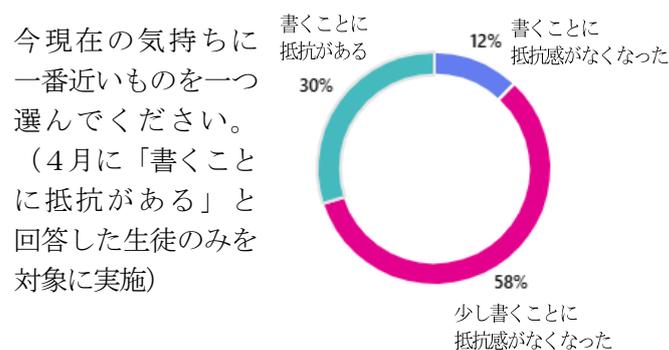


図5 全国学力・学習状況調査「書くこと」の推移

全国学力・学習状況調査 「書くこと」の推移	
令和5年度	令和6年度
51.8%	62.3%

- 図1、図2から2年間の取組を通して「0点（及び無回答）」の生徒数が大幅に減少し、「6～9点及び10点」の生徒数が大幅に増加した。
- 継続して「書く活動」に取り組んできたことによって、図3、図4のアンケート結果からも分かるように、およそ7割の生徒が「書くこと」に対して抵抗感が和らいだ。
- 「意見文の書き方」や「根拠を明確にした文章の書き方」を少人数指導で学ぶことによって、書くことに自信が付き、「書いてみよう」と感じる生徒が増えた。
- 少人数指導によって、教師側も細かな添削ができた。生徒はお互いの作文を読み合い、表現を共有できた。

- 視写や速音読を継続して行うことで、文章を文字として捉えるのではなく、文や文章として捉えることができるようになった。
- 「書くこと」に抵抗感が薄れたためか、全国学力・学習状況調査において、「書くこと」の正答率が上がっている。(図5)
- 少人数指導によって、教師側も細かな添削ができた。
- グループ活動を多く取り入れたため、生徒はお互いの作文を読み合い、表現を共有できた。また、進行係など、役割を決めることで、スムーズに話し合いが進んだ。
- 少人数指導において、丁寧コースでは、生徒が質問しやすく、これまで書くことに抵抗を感じていた生徒も進んで学習に取り組む様子が見られた。

4 今後の課題

- 図2より第3回定期テスト作文点数の「6～9点及び10点(高得点層)」の生徒数が第1回及び第2回と比較して大幅に減少している。これは、入試対策を踏まえたレベルの内容を扱ったことで内容が難しくなったことが原因と考えられる。高得点層をいかにして増やしていくかが今後の課題といえる。
- 自分の考えを書くことに対する抵抗感が減少している生徒が多数いるが、相手を意識して、わかりやすい文章を書くことが課題となっているので、何かしらの手立てを講じていく必要がある。